

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

プロジェクト型の文理融合とフィールド共有

石森大知（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所／ジュニアフェロー）

社会開発分野においては、異なる研究分野の研究者が共同して調査・研究を実施し、実践的に問題解決にあたることが求められる。そのさいに、少し大雑把な言い方をすれば、文理融合というテーマは避けられない。これまで私は文化人類学者としていくつかのプロジェクトに参加した経験から、文理の研究アプローチの違いについて、「速度（調査・成果のタイムスケール）」、「方法（学問的な共通言語）」、「対象（人間中心かモノ中心か）」の3点を実感してきた。これらの点に関して、概していえば文理融合型のプロジェクトでは「理」主導に傾くことが多く、場合によっては「文」の関与の仕方は難しいこともある。とはいえ、「理」の成果をより効率的に地域社会に還元し、「文」の成果をより実践的な営為に移行させるため、また両者を包括する大きな枠組みを形成するためにも、文理融合は望まれているといえよう。ただし、ここで字義通りの融合、すなわち文理が溶け合って1つになると考えることは現実的ではなく、両者の「協調」に基づいて「新しい知見」を少しでも追加できればある程度の成功と考える。

そのためには、フィールドにおける研究者間の具体的な相互作用がきわめて重要である。ここで私が2009年3月に参加したツバル調査の経験に基づき、「ミーティング」と「ともに歩く」という点を紹介する。「ミーティング」は、全員が参加して毎夕に実施されるものであり、基本的に日中は別行動する各調査班をつなぎあわせる役割を果たしている。そこでは、各調査班から1日の調査内容およびそこから考える仮説、そして翌日の調査予定などが報告された後で、各班入り乱れて活発な議論が交わされる。あるいは、異なる班同士のコラボレーションの提案なども、この「ミーティング」から生まれてくる。つぎに、「ともに歩く」についてである。異分野の研究者と実際にフィールドを「ともに歩く」ことは、きわめて示唆に富む経験であった。というのも、ある事象や現象に遭遇したとして、それに対するアプローチや理解の仕方が分野によって異なるため、新しい知見を獲得することが多々あったからである。それまで全く気にも留めなかった事象と、自らの研究との関連性を認識させられることもあった。

私にとって、異分野の研究者のフィールドワークおよびその方法論を間近でみることは、いわば「異文化体験」であったといっても過言ではない。それは、1つには、文系／理系の学問的営みが、それぞれ定性的／定量的、質的／量的と形容される「差異」を有するものだからであろう。たしかに、これらのことを机上でいくら議論しても、なかなかこの差異は埋まるものではない。しかし、異なったもの同士の違いをそのままにしつつも、具体的な交流・交感を重ねることで、分野間の境界線が曖昧になるように思え、あるいはむしろ交差点も大きいと感じることもあった。それは、同一のフィールドに立ち、そして同一の現象をともに共有しながら、異分野の研究者間で展開される即時的かつ創発的な応答の連鎖・蓄積をとおして、醸成されてくるものであるといえる。